

*以下は2014年度に中村祐司が副査を担当した卒論3本、修論3本についてのコメントである（対象論文の筆者とタイトルは匿名とした）。

<卒論副査コメント1>

普段から政策研究に従事している意識はあったが、「言語政策」「言語計画」と聞いて改めて「〇〇政策」「〇〇計画」というのは森羅万象に及ぶものだと再確認した。

8頁で初めてCEFRが登場するが、ここで英語表記や説明をしてほしかった。「成人移民の言語学習」も「異言語学習による異文化理解」もヨーロッパの知恵の産物であることは理解できたが、西館さんはどちらに軸足を置いて論を進めようとしているのであろうか。読み進めていくと後者のCEFRのようにも思われるが、「ヨーロッパ全ての言語に適合できるような学習状況の評価法・指導法」であるCEFRはものすごく大胆な政策ではないだろうか。これが浸透・達成できれば、EUそのものへの後押しともなりそうだ。CEFRに絞って卒論を書く手もあったのではないか。

移民の受入を背景とするドイツの柔軟かつ多様な言語政策は興味深いが、その実情とどうか現場が直面している課題について記述できなかつたであろうか。

そのことは日本語教育政策についてもいえる。戦後から2003年までの日本語教育を時系列の表に整理し、2000年以降の変化にも言及している。ところが一般論の範疇を超えていないような印象を受けた。もっと西館さん固有の問題意識を出すなり、特定の時点での政策を取り上げて深掘りするなりしてもよかつたのでは。

関連機関である国際交流基金、文化庁、文部科学省を取り上げたり、カリキュラムを紹介したり、門外漢にとっても読みやすく、制度の勉強になった。しかし、どうも表面的な説明というかそのまとめに終始してしまい、課題がどこにあるのかがはっきり見えてこない。

32頁以下で人材育成の課題を指摘しているが、それならばどうすればいいのかといった点について言及できなかつたであろうか。

最後に言語政策の日欧比較を行い、その背景にまで踏み込んだ点は興味深かつた。その上で「ドイツの法律で定められているような公的プログラムを実施することだ」(35頁)と述べているが、そんなに簡単に導入できるものなのであろうか。政策を実現するための制度設計や財源調達などに触れてほしかった。参考文献やネット情報によく当たっているだけに、そこでは指摘されていないオリジナルな部分を出してほしかった。

<卒論副査コメント2>

「地域日本語教室」には国や行政に依存しない響きがあり、魅力的に感じる。1970年代後半に源があると知り驚いた。約40年もの歴史があるのだ。6-7頁を読むと、この事業を自治体とボランティアが支えてきたことが分かる。「交流の場」(12頁)であることも大きい。名称や分類法などの「統一が図られていない」点が地域日本語教室の魅力であり強みではないだろうか。「地域社会をミクロ・マクロで見ることができる力」(13頁)については具体的に教えてもらいたかった。

3章以下で紹介されるいずれの事例も興味深いが、筆者自身が現場に身を置いていないせいか、表面的な説明に終始してしまっている。まずは豊田市などを訪問してもよかったのでは。

4章では一転して現場訪問の成果が出ている(20頁以下)。現場のボランティアスタッフの生の声が吸い上げられていて、たとえば、「その人なりの教え方があるから」ボランティアになるための条件はないとする受け答え(21頁)など、教室が各々の個性を持つ人間交流の場であることが分かる。教える側も教わる側も対等で、各々のペースで従事・参加することが継続の秘訣ではないだろうか。義務と自発性の均衡をどうはかるかが問われているのである。「微妙な立ち位置」(22頁)との指摘がそのことを象徴しているかのようだ。

論文作成者は現地訪問によるインタビューの醍醐味を知ったかのように、別の基礎自治体に出掛けていく。動けば何かが見えてくるのである。現場ではボランティアスタッフも多くを学んでいることに気づく。ボランティアスタッフには熱意や価値意識も含め、その人の総合力が問われているのかもしれない。

29頁の比較の試みは貴重だ。そして地域日本語教室が「共に学ぶ場」(30頁)であるとする知見も貴重だ。確かに学習者にとってボランティアスタッフは「最も身近な友人」なのであろう。

5章では問題意識を広げてボランティア論を展開している。同時に、論文作成者自身が地域日本語教室で実際に学習者と接する経験にまで踏み込んでほしかった。そこから見えてくることも多々あったはずだ。



<卒論副査コメント3>

最初に、観光には、「自分たちの地域が持つ『魅力』や『強み』を再発掘し、見つめなおし、提示していくことで…」(要約)という記載にとくに関心を持って読み進めた。背景、歴史、課題、そして事例を丁寧に押さえつつ、論文を書き進めていることが伝わってきた。しかし、残念ながら、読み手がこの面での両市の例証を推測することはできたが、明確に把握することはできなかった。

全体的に1, 2章が長過ぎたのでは、もっと3章の事例に力を注ぐ手もあったのでは。そうすれば、関係者から関係者へつながっていくインタビューの醍醐味をもっと味わえたかもしれない。

「観光地は観光地である前にその地域の人々の『生活の場』でもある」(6頁)という捉え方はとても大切で、何のための観光か、誰のための観光かといった問いに対する一つの答

えなのであろう。

論文のタイトル「訪日観光客誘致・・・」と 14 頁以降の国内観光地についての記述 (1-3) とのつながりを明確にしてほしかった。たとえば図 1-1 (同頁) の「国内旅行者数」には訪日観光客数は含まれていないと推測できるが、そうであれば、国内旅行者の動向と訪日観光客とのそれをつなげる何らかの理屈が必要ではないだろうか。

観光地間の誘客をめぐる競合についての見解についても示してほしかった。観光地同士、さらには観光地内の関係者すべてが果たしてウィンウィン関係になり得るものなのだろうか。地域が一体となるよう強調しているが、そうだとする具体的な基準は果たしてどこにあるのだろうか。観光への住民参加についても、現実にはペイを伴うものとするのか、そうでないかによって盛り上がりには大きな違いが出てくるのではないだろうか。

観光の文化的効果や社会的効果に注目したのはよかったが、今後はこれまで以上に治安・安全対策も不可欠になるだろう。これが最上位の課題と位置づけられるようになるかもしれない。

両県レベルの観光政策における両市の位置づけについても少し触れてほしかった。そうすればより一層重層感が出たのではないか。

「行政も民間も地域で一体となって取り組む」(46 頁)や「地域一丸となって」(同頁)の実現はそんなに簡単なことではないと思う。繰り返しとなるが、その例証の基準はどこにあるのかを示してほしかった。

インタビューの対象を両市の行政担当職員、観光協会のスタッフ、ボランティアスタッフといった具合に揃える手もあったのでは。訪問市街地の多言語案内板などは現地を訪れたがゆえに得られた収穫だ。長年国際観光に取り組んできている訪問市の強みがよく伝わってきた。またそこにはヨーロッパとアジアからの訪日者の「客単価」の差を見据えるシビアの姿勢もあることなど興味深かった。

<修論副査コメント 1>

高齢者社区サービスはいかにして進んできたのか、今後高齢者向け社区サービスを充実するために何が不足し、解決すべき課題は何で、そのためには何が必要なのかについて検討する、といった問題意識はしっかりしている。先行研究も相当な量をこなしている。

ところが中身は社区サービス全般を取り扱っており、論文タイトルのずれがどうしても気になる。また、情報提供の制約があるのか、予算のしくみなど社区の財源の面には触れられていない。社区の福祉施設では多世代間交流はあるのかといったことも知りたかった。さらに、アンケートや現地でのインタビュー内容をもっと掘り下げることができなかったのか。

一番の問題は、せっかく現地調査などで良く調べているのに、そこで見えてきた課題にもとづく改善提案などが皆無である点である。「市の実情に応じて医療制度、社会保障制度など諸体制の整備や高齢者に対する福祉、介護サービスの強化を急ぐ必要がある」「新たな

資金収集ルートを切り開くことが求められている」などは、見方によっては考察放棄である。

さらに「今後は各機関が互いの機能と役割を明確にし、相互に協働していく必要がある。合理的かつ効率的な取組を行うことができるよう管理機能の強化を図るべきである」「安定的、持続的な医療・介護・福祉サービス保障体制の整備が必要である」「医療、年金、福祉、介護の各分野の制度を整備することや低所得高齢者等の支援を取り組まなければならない」といった文章表現が続く。

こうした記述は何も言っていないに等しい。最初の半歩、一歩でもいいから実現性のある指摘をしてほしかった。



<修論副査コメント2>

活動の起源が1970年代にあることを当時の新聞記事の紹介も含め、この種の文化事業でポイントとなる資金確保にまで踏み込んで、丁寧に説明している。年会費300円の徴収など会を継続させる知恵が当時からあったのだ。しかし現実には甘くなく、会と会館との摩擦についても記述している。「文化の問題は個人の趣味の問題であり私事にすぎない」という当時の行政の軽視には驚く。その後の活動方針をめぐる課題に直面しつつも会は活動を継続していく。だからこそ「鑑賞する音楽」から「参加する音楽」への転換も可能となったのであろう。チラシなど当時の資料を保管しておいたことが、論文作成に役立っている。

80年代以降は助成金も獲得するようになった。90年代に入ると児童合唱団も形成されている。

文化ホールをめぐる相反する意見や指定管理者制度導入後の動きなど興味深い。筆者は文化ホールが多目的ホールではいけないと考えているのだろうか。また、バブル時代のハコモノを現在、筆者はどのように評価しているのだろうか。また、近年では「みんなで音楽を作り上げる」意識が失われてきているという。それではどうすれば「協働意識」を高めることができるのであろうか。

「クラブ活動や部活動において音楽は、体育系の活動とともに一定の地位を持っている」という指摘が頼もしい。また、「まちに出て、市民に働きかけ、音楽の活性化を図る試みがまず必要」とする指摘もうなずける。

実行委員会方式、歴史的文化資源の活用、児童生徒への貢献といった行政との協働をめぐる秘訣を提示しているが、実践に裏打ちされているだけに説得力がある。ただ、「指定管理者の硬直化した管理運営」と決めつけているが、その理由（裏付け）は何か。

実践した筆者自身にしか書けない資料価値のある論文である。この点を高く評価したい。44ページのポスターは秀逸だ。一方で「音楽祭の開催にあたり、実際に活動した人は、数人にすぎなかった」という指摘は重い。

69ページで指摘する音楽祭をめぐる広報活動など6つの課題は、他のまちづくり活動においてもいえる。やはり主催する組織とそれを構成する人の熱意と力量に掛かっているのである。72ページのポスターもとても魅力的だ。国際交流の貴重なツールであることもわかる。

6章の記述は音楽が絡まずに一般論に終始しており物足りなかった。また、最初に問題意識や課題の設定がない点も残念であった。しかし、資料的価値という点でそれらの欠点を補って余りある論文に仕上がったと思われる。企画書などの資料添付もよかった。

<修論副査コメント3>

果たして何を比較したものであろうか。パンフあるいは関連雑誌の紹介レベルで終わっているのではないか。本格研究に入る前の「地ならし論文」で終わってしまっている。問題意識が総花的である。情報源としてのHPの限界も感じる。オリジナルな視点がほとんどない。

介護事業などに乗り出したりする「水平的な変化」や、実質的には受験生は評価権があることなど興味深く、こうした点を具体的に掘り下げてほしかった。また、インタビューの成果がわからない（分量が少な過ぎる）。

読んでいて迫力があつたのは、現場に従事するスタッフへのインタビューであっただけに残念である。

提案があまりにも一般論、建前論で無責任である。検討結果にもとづいた形で、実現可能な実施策を提言すべきではなかったか。「効率」という用語の使い方にも疑問が残った。
